

〈私 の 研 究〉

石 白 の 研 究

三 輪 茂 雄

扶桑館と中学の建物の間、木かげに石材がたくさんあって、ときどき石工仕事をやっている。ここは私の仕事場の一部になっているが、いろんな専門の先生が通りがかりに立ち寄って、雑談してゆかれる。ものずきな学生諸君が集まってくることもある。今はすっかり忘れ去られてしまった石の粉挽き臼を、手づくりで作っているの、とにかく珍しいよう

だ。石屋の職人さんと思って、工事に来た土建屋さんたちが一服して、「こんな重労働は今どきありませんなあ」と感心してゆくこともある。

ところで工学部と石臼とが、誰でも容易に結びつかないらしい。化学工学科粉体工学研究室と聞くと、「はあ、臼で粉を挽くんですか、なつかしいなあ、昔はこれで挽かされたものですわ」というのは年配の人たちだ。学生諸君にとっては、たいてい見たこともない不思議な石にすぎない。

い。「そんな古くさいものをなぜ工学部で研究するんですか」という質問が多い。工学部は最新式のものばかりやるべきだと思う石頭の人たちだ。

趣味でやっているのではない。まず理化学館二階にある「臼類資料室」へ案内しよう。ここにはわが国の北から南まで各地の代表的な石臼のほか、摺り鉢、つき臼などが保管してある。ひと口に臼というが、人類は数十種類の臼を発明し、主として食品の加工方法を進歩させてきた。人間の生活の基本的器具であるこれら臼類(Mills)を生物の進化論のように体系づけておくことが必要だが、不思議なことに、日本にも外国にもまとまった研究は全くない。名称さえ、はつきりしていない。旧約聖書には「うす」「ひき臼」などがたくさん出ているが、聖書考古学と照合してみると、石のつき臼だったり、エジプト時代のサドルカーンだったり、オイルミルだったりする。「悪人のオリブ並み木の中で汗をしぼり、酒ぶねを踏んでもかわき覚える」(ヨブ記24章11)。これは協会の訳。岩波版では「石うすの間で彼らは油をしぼり……」とある。「並み木」は完全な誤訳、石うすというのは、エッジランナー形のオイルプレスのことだ。「その心臓は石のようにかくく、うすの下石のようにかたい」(ヨブ記41章16)。

これは、サドルカーンである。

ところでわが国の代表的な回転式石臼は、粉挽き臼と杵臼である。昭和二十年前後に復活したのは粉挽き臼であった。その後の食品工業の発達により、石臼はだいぶ姿を消した。しかし絶滅したわけではなく、京都市内でもとうふ屋さんにはわずかに残っている。東京ではとうふ屋さんの臼の目立てをしている職人さんがいまでも健在である。なぜだろうか。これは古いものへの郷愁や頑固さからではなく、現代の機械でつくったとうふはうまくないからだ。とうふに限らず、さいきんでは、「石臼そば」がちょっとしたブームである。「石臼そばでない」と、お客さんが来てくれまへん」という店もある。その秘密は高速粉碎対、低速粉碎、鋼や砥石の粗面對、石の面など、食品粉碎の難問題がからんでいる。

ところで、石臼はいったいいつわが国に伝来したのか、一般に普及したのはいつかについては、まだ全くわかっていない。さいきん各地の発掘調査で、かなり古い時代の石臼が出土している。本学校地学術調査委員会の発掘でも、いくつか出土した。石臼の考古学はこれからの興味ある分野として残されている。

(大学工学部教授・化学工学)